

「東印」再建記

山口 健 助

すでに四十年近い回想で、記憶もだいぶ薄れたが、幸い芹沢喜倉君のメモ（東印始末記Ⅱ白井新平個人雑誌「ながれ」510）で一部が明らかになったのであえてその記憶をたどってみた。

しかし、思いちがいもあるうし、人名も忘れたが、東京印刷組合の再建はアナ系の空白を埋める一つのドキュメントである。埋没したアナリズム運動を発掘するためにも一つの資料となれば幸いである。

無政府共産党の波紋

昭和十年十一月十一日ーいや正確に言えば十二日午前一時ころであったと思う。霜柱のたつ肌寒い朝だ。

僕（旧姓山田）はそのころ神田三崎町の競馬新聞に勤めていた。そしてねぐらを神保町三丁目の駄菓子屋井田リクさん方で二階借りをしていた。

競馬新聞は夜のうちに出馬表を印刷し、朝発送するので、文撰工の僕は夕方の五時から十一時ころまで勤務するのがならわしであった。

その日はまた偶然同志のひとりである伊藤房一君（戦

時中小倉市で病死）が泊り込みにきていた。彼の「女郎買い」話を聞きながら眠りについていたのが十二時すぎであった。

そのとき突然階下のおばさんのたまぎる声と共に、どかどかと踏み込んできたのが警視庁の関警部、諸田巡査、西神田署の佐藤特高主人ら五、六名の特高係だ。

そのまようむを言わず僕と伊藤君は手錠をかけられ、自動車で西神田署に運ばれた。

ブタ箱につっこまれるというわ、いるわー東印大山印刷分会の柴田知之、加藤栄太郎、川合大三、佐々幸三、奥村英太郎君をはじめ黨員の満田友之助君ら十名近い同志と、それに朝鮮東興労働の同志たちもいた。

たしか梁一東、丁讃鎮君らもいたと思う。朝鮮東興も三崎町の事務所に泊っていた十数名がひっぱられてきたのだ。

これが世にいう無政府共産党事件の波紋だ、白井新平君は中野療養所に加療中の愛妻政子さんに。

「山田も加藤君（競馬新聞社長）のところからやられたらしい」

とハガキで報らせている。（白井新平、政子書翰集「ながれ」より）

昭和十年末といえ、満洲事変は一段落したものの中

国侵略の第二の火ダネはいたるところにくすぶっていた。無産政党も労働組合も右へ右へと転回し、いわゆる「聖戦」という名の侵略戦争に同調していた。そして翌十一年二月二十六日、皇道派の青年将校による軍隊の反乱が起きるといふ、陰悪で暗い世相であった。

アナの転向者も続出し、佐藤栄三、松本親敏、宇田川一郎、千葉浩、芹沢喜倉君らはファシズムに馳った。

また、高橋光吉、白井新平、大塚貞三郎、綿引邦農夫、布留川信、大久保卯太郎、小川猛、鶴岡直和、若杉浪雄、新井松太郎君らも第一線より去り、江西一三君も大阪にひっそり息している。

全国自連（全国労働組合自由連合会）東印の本部である神保町一丁目（いま共産党のあかつき書房の裏）は僕にとって愛着の深いところであった。

サンジカリスト派といわれた東京印連（関東出版）時代から五カ年間、それを根拠地として日常斗争に明け暮れしてきた。

ところが、東印、関東出版合同後、東印、全国自連となつてから梅本英三、伊藤悦太郎、三井利貞、田所茂雄君らが常泊していた。しかもこのメンバーはいずれも無政府共産党の党员であった。

僕を的にしたサンジカリスト退治のピラが撤かれ、東

印の集まりもこうした党员たちによってかきまわされていた。僕は

「何かあるな？」

と、彼らの行動を見守っていたが、就職を楔機に事務所を引き払って井田さん方に転居した。

だが、関東出版以来の伝統を継ぐ東印は必ずしも党の指導下におかれたわけではない。また当時のアナ系には労働組合というも工場に組織をもつものは東印のみであったというも言い過ぎではあるまい。

東印再建のために

西神田署に引っぱられたものの僕や加藤、柴田、佐々、奥村君たちは党との関係については取調べの圏外におかれていた。僕はもっぱら「手記」を書かされていたが、警視庁は

「検事局は君を起訴しろと言ってきている今度の検挙で君の影響を受けたものが多いからね。」

あとでわかったことだが、国分艶子、田村徳太郎君は深川扇橋署に、内田君は愛宕署に秋本義勝君たちもどっかに引っぱられているらしい。

詳細なことはわからないが、東印でしかもサンジカリスト系と呼ばれる人々はかなりの数にのぼっていた。ま

た党员の満田君やシンバの川合君に対する拷問はひどいものであった。

僕は二十九日のムシ返して翌年一月釈放された。しかし、ブタ箱の中で再び東印再建の決意を秘めていた。

「このまま尻っぽをまいてたまるか」

弾圧を受けて斗志ががぜんかきたてられたのだ。それに幸いなことには、菊地長太郎、山本徳市、堀江磯吉、古川清幸君らの長老組が無傷だ。原井弥一、中村茂、国府田賢二君らも健在だ。

また、大山分会（六〇名余）は広瀬長太郎君を主軸として微動もしていない。豊栄社分会（二〇名余）も無傷だ。

大山分会は東京印連（関東出版）以来の締め付け工場で、青年分子が多く占め、婦人部として加藤君の愛妻とみさんを始め金森みつ子、内田静子、国分艶子さんなど婦人斗士もいた。

しかし、事務所は西神田署により厚板で十文字に封鎖されていたが、佐藤特高主任立会いのもとに開けさせ、一切の書類を井田さん宅に運び、それから間もなく僕は荏原中延に転居した。

東印を再建すると決意したものの同志の所在をまず明かにすることであり、それに同志の救援も必要である。

伊藤君がブタ箱で血を吐いて倒れた。結核の彼はまず故郷に帰すことであった。

秋本義勝は小説「痴人の秋」に次のように述べている。

「康治（秋本）は四十日目であろうやうに陽の光に当たることができた。西神田署から先に釈放された組合委員の佐野（山田）が康治を忘れずに出迎えに来てくれたのは嬉しかった。佐野は今度の事件で組合は壊滅状態の有様だが、新しい方針で組合再建をはかなければならぬ。そのために康治に一肌脱いで欲しいと頼んだ。」

康治は自分の心境をありのまま佐野に告白して辞退した。佐野はそれ以上強いてすすめなかった。佐野の云った通り無政府革命（共産）党事件の後は組合員達は事務所に寄りつきそうもなかった。この事件で何も知らない組合員達がまきこまれたショックは余程大きかったのだろう。

しかし佐野の意志は執余深いものがあるらしく、組合再建のために有志の間を駆けめぐっていた。

僕が組合を再建するためにまず相談相手に選んだのは秋本君だが、彼はその時の返事は「ノー」であった。だが、組合がいよいよスタートするとき、彼は常任書記として協力してくれた。

東印と全国自連は別に改まった解散声明を出したわけ

ではない。また組合が壊滅し、執行機関も姿を消した今日、すべて僕の単独責任で処理したのだ。

これが東印の長老延島英一、大塚貞三郎君らを刺激したらしい。

「山田は警視庁に懐柔されて組合をつぶした」

と、デマ宣伝が流された。だが、この長老たちは第一線を退いて組合とは全く無縁の存在であった。

だが、東印再建の工作をすすめたものの、その年、二、二六事件が勃発し、日本帝国主義はいよいよ牙をむき、政界、財界、言論界を支配し、ファシズムの波は滔々と労働界を席捲し、息つくことすら出来ない状態であった。

印刷工戦線の統一を

しかし、国内のきびしい反動攻勢の中にあつてアナキストには一沫の希望が湧いた。それはスペインにおける人民戦線の勝利と間もなく始まった内戦だ。ファシストと斗かうFAI（イベリアアナキスト連盟）CNT（全国労働連合）の果敢な英雄的斗争は眼をみはるものがあった。

これがひっそり息していた日本の残党にも光明をあたえた。荏原中延の菊地君宅を根城として、堀江、山本、加藤、柴田、広瀬、古川、中村君たちがしばしば集まり、今後

の方針を討議していた。

それに幸いなことには、それまで僕にうるさくつきまわっていた警視庁の諸田巡査の眼を放れることができた。僕はそのころ古いアナキストで、村中俊道氏の経営する「拓殖情報」を編集し、生活費を稼いでいた。ところが諸田は白金三光町の社にまでしばしば姿を現わした。

だが、二、二六事件以後、右翼の処理で急がしくなつたらしい。警視庁のアナキストはまた右翼係も兼ねていただけに、アナの残党など相手にするひまもなかったのだらう。

東印を再建するに当たって、まず組合の性格、基本方針をどうするかが論議の焦点となつた。これまでアナのもつセクト主義は、自らを「革命的労働組合」と規定し、他を一切改良的、反動的労働組合として非難してきた。

求めて孤立主義に陥り、日常斗争でも他の労働幹部を「大衆より切り離す」という独りよがりの分派行動をとってきた。だが、急迫する戦火と反動攻勢は、こんな甘っちょろい方針を許さない。それに東印がいかに日本労働運動の名門であつたとしてもいまは消滅したゆけがらにすぎない。

反戦、反ファシズムの下に、いまこそ全印刷工戦線の統一が要求された時代はあるまい。そのころ東京市には

いくつかの印刷工労働組合、親睦団体が出来ていた。

（労働組合）

- ◇東京出版労働組合（代表者高津正道）組合員数不詳
- ◇合法左翼、◇関東出版労働組合（代表者河野密）不詳
- ◇全労、◇出版印刷従業員組合（代表者徳永正報）不詳
- ◇総同盟、◇日本出版労働組合（共産党・非合法）不詳
- ◇全協

（ギルド組織）

- ◇出版工俱樂部（代表者柴田隆一郎）三〇〇名、◇欧工の友（不詳）六〇〇名、◇親技会（不詳）一三〇名、◇印刷工技工会（不詳）五〇名、◇印刷工相互会（不詳）五〇名

そのほかに「失業者の赤十字」と称する「働きまじゅう会」（代表者木村清五郎）八〇〇名があつた。これは私設の職業紹介機関で、低賃金で臨時工を売り込み、幹旋料をピンハネするというダニのような存在であつた。

また出版工俱樂部は、昭和十三年には二〇〇〇名を超える大組織となり、共産党オルグ柴田隆一郎君が指導していたが、左右分極にゆれていた。

東京出版は、オールドコムミニスト高津正道君が代表者だが、戦後総評事務局長となつた高野実君が実質的に掌握していた。

東印の再建はまずこのバラバラの印刷工戦線を統一することである。そのためには総同盟、全労、全協等の労働組合、働きまじゅう会を除き、これを一つにまとめることに目標をおいた。

そのために東印は思想的セクトを捨て、広汎な大衆組織としてスタートすることにあつた。結成の機は熟した。昭和十一年七月五日、新出版労働組合創立準備会を神田神保町三丁目の井田リクさん方中村茂君宅に開催した。

以下、芹沢喜倉君（彼は右翼から再び陣列に復帰した）のメモからたどってみよう。

（創立準備会）

出席者 山田、村井、芹沢、中村、柴田、広瀬、加藤、秋本以上が準備委員となる。

- 一、名称 東京印刷工組合準備会
- 二、事務所設置、準備委員の選出、綱領、規約の起草等を協議

◇第二回準備会（七月十二日）

一、規約の審議、専門部の設置、準備委員は執行委員となる。

二、専門部設置 ◇書記局。山田、秋本、永山◇組織部。芹沢、坂村、中村、益子◇教育部。秋本、柴田、山本◇事部。堀江、山田、加藤◇婦人部。加藤（。

印は長)

結成当初の東印の組織は大体次の通りで、組合員も一〇〇名そこそこであったと記憶する。

大山印刷六〇名余、豊栄社二〇名余、ダイモンド(不詳)和田印刷(不詳)小川印刷(不詳)共立印刷(不詳)細川印刷(不詳)松田印刷(不詳)

そして八月四日準備会の名をはずし、新事務所を神保町二丁目のガレージ二階二間を借り、僕と原井、永山(のちに秋本君が常任となる)の三人が常駐することとなった。

ともあれ、無政府共産党弾圧により、いったん壊滅したアナ系労働者組織がささやかながらここに旗揚げした。いわば、風雪にゆらぐ「残燈」のようなものであったろう。(この稿続く)

リベルテール・サロン

毎週火曜日、夕六時より八時迄

水道橋・歯大前東京駅寄、コージ

誰でも訪問も参加も可能です

募集

リベルテールは皆さんの参加によって維持されています。原稿、表紙などをどしどしと!

—のびのび—

△小川さんより

台風6号去って大阪は日中やっと三〇度前後、又はそれ以下になりましたが、関東の方はいかがでしょうか。

六・七月「アナルコフェミニズム」特集号は二度ほど通読して、友人(女性)に今読んでもらっています。今年は、新聞や雑誌で特集が多いのですが、「リベルテール」でやっと焦点のあった論評を読んだと、僕には思われました。

山本松男さん編集の「エートピア論争」は一ベン通読した限りでは内容が豊かで、ただアナキズム運動のダイナミズムが重要だということだけ。なんとなくわかった気持ですが、これからの生活の大部分は、ここ数年は職業訓練(大学及び病院)で占められるのですが、アナキズムを唯一の理想としている者がいかにその思想行動を確立、変動させていくのか、が課題です。とりとめもないことを書いてしまってますいません。

△若杉さんより

何かかいてのことですが、七三才の老友が旧い話をかいても時の差で若い者に伝えるものもないと考えるので、私が哲学的にみたアナキズムをお知らせします。

クロボトキンの相互扶助論を労働者時代四日かゝって

読了しました彼の生物の本能の美点はすべて明らかになりました。

しかし、これが根底であるために愛が理性として目覚める点についてはつきりしませんでした。

アナキズムにおいては、あらゆる場所に随時に愛情が発露されるものを真理としたいと思います。

真理とは理性の代言であろうとおもいます。

理性が社会的な正義観となつて、体質から生れてくるのであらうと思います。

社会的な正義観は、あらゆる人達が平等不偏に持った時は、同一の行動となつて生れるように思います。

その時も愛という理性が感情の底流に存在しないのならアナキズム的ではあつてもアナキズムとはいえないと思います。

アナキズムが人類愛であることは唯心論でも唯物論でもなく、ために宗教者に似て、そうではなく、唯物論的行動のサンジカリズムでもマルクシズムでもない、人間の個体に存在する正義観として意義があるのではないのでしょうか、私はアナキズムは個人が相互的にいつ如何なる場所でも随時に愛をわかち合う本能の浄化した理性であらうと思つてます。

△小川さんより

現在迄の私は、労働組合内にとじこもりきりでそれを良い事に、他の活動をサボっていますが、なんとかそんな自分を乗り越えて行きたいと考えます。

しかし、私の前に立ちばはかるさまざまな障害に自分をいつわらずに正直に、ぶつかって行くと云う事はなんと云う勇氣の努力のいる事なのでしょう。

既にお話しした事があるかも知れませんが、足掛け七年前、私達執行部六名の解雇と分裂と云う状況の基、解雇は裁判で、差別等は地労委でと、その外職場での活動も含めて、いろいろな手段で斗つて来ました。

その結果、六年半振りに、やっと地裁の判決が出ました。(判決日五月二一日)内容は、勝訴と云う事ですが会社は控訴し、私達の六年半の未払い賃金さえも払わないと云う挙に出ました。

日常、裁判等信用出来ない々と云つて来た私も、知らぬ間に、この制度のとりこ、になつてしまつている事に気が付き、今度は良い勉強になりました。

これを機会に、今後、労働組合のあり方について、私なりに考えながら、職場で活動して行きたいと思ひます。加えてアナキズムの勉強と合せて頑張つて行く処存です。

以上、手前勝手な事を、どうせ書くならもっと委しく書ければ良いのですが、近況とさせていただきます。

〔追伸〕

「橘宗一」少年の墓保存会については、すみさん、鬼頭さんを中心に進めています。

「リベルテール読者の会」を聞くに際して：

10月12日左記要領で読者の会を開きます。小冊子「リベルテール」は巻Ⅵを11月で終り、Ⅶに進みます。これで満6年を読み終ります。その間色々ありました。終始読者とコミュニケーションする場として、また広義にはリベルテールの成長に役立つ栄養素としてかわりを持って来ました。むろん「リベルテール」はリベルテール誌を毎月出すだけのものなわけですが、有志の物心両面に亘る負担と協働を受けているのですが、また同志的友愛を示す友人からは「リベルテール」の主体の在り方、その方針など、その都度質問を載っています。

そこで今回の談話会では大方のアウトラインをそれぞれが理解しあい、継続発展に資する基本路線につき検討をお願いしたいのです。

記

とき 十月十二日（日曜日）午後一時～午後五時迄

が明きらかだとすれば、そのアンチテーゼとして甘粕正彦は何を考え、どう行動したかを知るのには意味があるだろう。何故なら私達の風土では未だにアナキズムは外来思想の「自由、平等、博愛」のフランス革命以来の主張に基づく輸入思想であり、これに対し日本の歴史と土着思想―当時では国体明徴―からは絶対に受入れ難いとする主張があるからだ。また甘粕については「丸い黒縁の眼鏡をかけた冷酷な爬虫類」とする憶説がある。これは彼が特務機関の長官だった職務にまつわるいまわしさからのものであって、角田氏にこれを書かせた動機は実にその背景をえぐりだし人間甘粕を鮮明にする意図であったと思われる。ではそれは成功しているだろうか。聞き書と資料と甘粕が仮寓したフランスの田舎の実地踏査から成るこの一篇は小説のジャンルでは過渡期なものでノンフィクションに属するだろうが、事実は何れ程事実を積み上げていても真実にならず、対象が事実の裏でまだ隠れているという感じを免れない。つまり人間甘粕正彦は著者の感性的な部分でしか触れられていないのである。例をあげよう。一年半の刑期を終えて甘粕はフランスへ流亡を希望する。費用は軍の機密費からでているのが関めかされている。歴史の皮肉は大杉がサンテ刑務所で今様に言えば何んでもみてやろう式に振舞っていたフラン

ばしょ 池袋・豊島振興会館2階中会議室
なまえ 「リベルテール読者（書）の会」

（スケジュール）

- 一、あいさつ 三浦精一
- 一、あいさつ 萩原晋太郎
- 一、現状報告 編集部紹介
- 一、会計のせつめい

（テーマ）

- 一、リベルテールの会と「リベルテール」
- 一、「リベルテール」の維持方法
- 一、これからの問題点

（自由座談）

以上

司会 はしもと・よしはる

記録 吉葉

「甘粕大尉」角田房子著―中央公論社版

今になって大杉が柔道の黒帯で絞殺されたのか、麻布三連隊の宮庭で銃殺されたのか―その事実を訊ねても、本書の著者が探究の末にぶつかったのが関係者の石のような沈黙と拒否であつたとすれば詮ない事である。しかし、主義者としての大杉が何を考え、何を訴えていたか

スで、甘粕は賭け事に気をまぎらせ、付逢いは軍関係者―それも狭い関係者に限られているが―妻と二人悶々の日を送っている。陸軍の為にフランス語を学ぼうとするがそれも思わしくない。フランス人との交友はない。つまり彼にとつてのフランス留学は日本近海の離島に幽へいされたのと同じなのだ。本土とつながる糸が軍であつたのだ。とすればどうしてここで彼は「フランスの自由・平等・博愛は絶対に国体と相容れない。日本から驅逐すべきだ」との信念をもち得たのだろうか。フランスくんだりまで出掛けないとそれが判らなかつたのだろうか。それは嘘である。作家の眼は本来そうした生きた人間のまだ主客未分なものを形あるものにして呈示するのがその一つの仕事だとすれば、角田氏は余りにも素朴に対象の言明を信用しすぎる様に思われる。そして決定的な事柄はイデオロギーが何人であるかを知らないということだ。本書が明きらかにした甘粕正彦は、家父長制の下で一家の名譽を過剰なまでに背負わされた長男が、家族の模範としての期待に答えようとして、幼年学校に学び、機械体操による骨折を挫折の契機として、末は大將か將軍になる宛のない兵科憲兵を選び、軍閥の中の一支流に身を置き、そこで意向を受けて大杉殺害に加担し、人生の裏街道から関東軍と組んで満州国建設に参画し、

特別資料

七〇才のサルトル

M・コンタ 貴方の健康について色々噂がありますが今月で70才ですね。サルトルさん、如何ですか？

S 良いとは言えないが、悪いとも言えません。この2年間色々悪いところがありました。1キロも歩くとすぐ足が痛むのです。それに血圧が問題で、ところが急にそれは問題にならなくなってしまいました。一番悪いのは左眼の眼底出血で、それが僕のを視る只一つの眼だから1才です、3才の時左眼は見えなくなったのです。1だから今ではものの形がぼんやりみえるだけになってしまつて1光や色は見えますが、事物や顔が明瞭に見えないので、読み書きできないのです。もっと厳密に言えば、書くことはできる、つまり自分の手で言葉は形づくれるけど、それはなんとか出来るが、自分の書いたものが見分けられないのです。読む方は全く駄目になった。行や文字と文字の開きは判るけど言葉自体の識別ができない。読み書きの能力がないのだから、僕はもう作家としての活動の可能性がなくなった。作家としての僕の職

自己の行為のすべてを皇室の「尊榮」と日本民族の繁榮に仮託し得た幸福な組織人ということになる。裁判の席で橋宗一少年殺しを詰問され、自分も子供は好きだと釈明したとしても、ぼくを納得させることは出来ない。「ファシストだつて子供は好きで無口で目的達成のためには禁欲的であるだろう。そして掌も柔かいだろう。しかし彼がファシストであることに変わりはない」のだ。また次のようにも言えよう。「右も左もみな同胞」。そう。しかしこの場合、右に立つた男が左にいた同胞を殺した。それが裏街道とはいえ、彼の榮達につながり、更に多くの同胞を苦しめさいなんだという事実は、例え満映三千人の社員から彼甘粕が愛慕されたとしても、それから北京の並木の伐採を取止めさせたとしても、いづれ権力の中核に参加し得た者の思いつきであつて、ヒューマニズムとはそれ程甘いものではないことを知るべきであらう。